



Title	中日挨拶言語行動の対照研究
Author(s)	曹, 偉琴
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1991, 25, p. 33-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56545
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中日挨拶言語行動の対照研究

曹 偉 琴

第一部 研究目的

1-1 現代化された今日では、人間の交流は、一層複雑、しかも頻繁になってきている。挨拶という社会行動は、人間が他人と交流するに当って送る、一言の健康の安否の質問などの言語行動や小さな微笑みなどの非言語行動を含み、極く日常的で、平凡な社会行動である。しかし、「人間同士の友好的な社会関係を維持する」ために、挨拶は人間社会に欠かせない大切な役割を果たしている。

1-2 挨拶は、普通、「今日は」「有難う」などの短いきまり文句的な言葉だけをさすと考えられがちである。しかし、考えてみると、「お早うございます」、「バイバイ」などの類は当然ながら、初対面の人への自己紹介、お詫びと謝意の表現、公式の席での祝辞、さらに、時にはお世辞などまで、挨拶との境界の明瞭でない表現も、挨拶と見做すことができると思われる。また、挨拶はほとんどの場合言語以外の行動を伴い、時には無言の御辞儀や、相手の話しを聞いている時の相づちなど、非言語的行動のみの場合もあるので、言語だけに着目していると、挨拶の本質を見逃す可能性が十分にある。握手、抱擁、さらに、「いつもお世話になります。ほんのお礼のしるしに……」といってお菓子を差し出したときの「お世話」という非物質的贈与への感謝のお土産やプレゼントなども、挨拶の一種として考えねばならないであろう。

1-3 以上から、挨拶研究にあたっては、言語内原則（どの言葉を用語として使用するか）と同時に、言語外原則（いつ、どこで、だれに、どんな行動を使用するか）との両側面に着目する必要がある。中国人の言語行動と非言語行動と日本人の言語行動と非言語行動を比較する場合、言語内原則と言語外原則について、共通しているところがあるのは当然である。他方、文化と習慣の影響から、差があるのも当然である。

日本の挨拶言語行動と非言語行動は、形態論と意味論の観点から、すでにかなり詳しく記述され、分類されている。しかし、中国の挨拶言語行動と非言語行動は、理論的に研究されたことが殆どないと言っても過言ではない。中国は巨大な国で、10億人以上の人間が共存しているから、中国の社会において、人々が友好関係を維持するために、挨拶という言語行動は、その独特な伝統文化のもとで、いうまでもなく何らかの形で機能しているはずである。その研究が今後大に行われる必要がある。また、中国と日本は一衣帯水の隣国であり、両国の交流が、いろいろな面においてますます盛んになってきた今日、両国のコミュニケーションにおけるギャップをなるべく無くし、相互理解を円滑化し、一層促進する必要がある。そのために、両国の挨拶言語行動の対照研究が推進されるべきである。ここでは、その糸口としての小研究の結果を発表し、御批判を得たい。

1-4 ここでは、以下の問題を中心に、両国でアンケート調査を行い、その結果を通して、広い意味での挨拶言語行動の比較を行いたいと思う。

- A, 挨拶意識における中日の差
- B, 挨拶の使用頻度における中日の差
- C, 挨拶の形態における中日の差
- D, 聞き手の社会属性における挨拶の差
- E, 日常の挨拶における共通点と相違点

第二部 アンケート調査について

2-1 調査の概要

予備調査は、1989年7月から8月にかけて、在日中国人留学生を対象に行い、本調査は同年の9月から10月にかけて、日本では、日本人大学生及び中国人留学生を、中国では、南京市在住の中国人大学生を対象に実施した。被調査者の選定にあたっては、理想的には、ランダムサンプリングで行うべきであろうが、今回は便宜的に機縁法によった。日本人大学生は、摂南大学、龍谷大学、甲南女子大学などを中心に、在日中国人留学生は、甲南女子大学、大阪大学、大阪府立大学、K I C日本語学校などを中心に、中国では、南京化学工業大学を中心に選出した。被調査者の年齢層を見ると、日本人大学生と中国本土の大学生は、20代の若者がほとんどで、中国人留学生（日本語学校の初級学習者から大学院生までを含む）は、19才から39才までにわたっている。なお、被調査者の人数は、日本人大学生は100人、中国人大学生は100人、そのほか在日中国人留学生は60人である。

アンケートは、多肢選択式を採用しており、各項目は、日常的な挨拶言語行動の諸現象を、相手の属性「先生、同級生、同性、異性、……」や、挨拶言語行動を行う場所「自分の家、学校の寮、教室、……」と結びつけて設定したもので、特に、A挨拶意識、B使用頻度、C挨拶形態に注目し、16項目（A1-5、B1-4、C1-7）にわたる。

被調査者の内容は次のとおりである。

性別	日本人	留学生	中国人	合計
男	44	18	69	131
女	56	42	31	129
合計	100	60	100	260

なお、今回の調査では、日本語の調査表と中国語の調査表の2種類を用

意したことを付言しておこう。日本人大学生には日本語の調査表を、中国人大学生及び留学生には中国語による調査表をそれぞれ使用した。

また、この調査では、地域の差を無視していることも付け加えておく。被調査者の出身地の細かい違いによる挨拶言語行動の相違はおそらくあるものと考えられる。しかし、今回は巨視的研究にとどまってしまった。

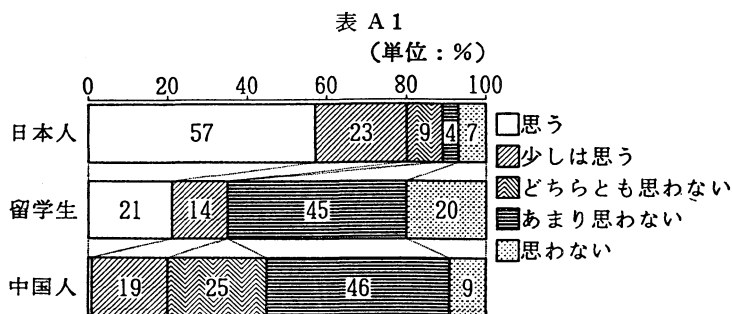
2-2 調査結果の分析

2-2-1 挨拶意識について（A項目）

言語、行動を比較する場合、実際は言語の裏にある文化を比較している場合もある。中日両国は文化背景、生活習慣が違い、挨拶言語行動の仕組みも違っている。日本の社会が国民に課する儀礼上の要求は中国人より厳しいので、日本人の挨拶意識は中国人より強いと思われる。日本の企業では、新入社員の入社教育を挨拶から始めるということもそのためであろう。そこで、挨拶意識に関連する項目を作って、調査を行った。

A 1

Q：毎日の生活の中で、しょっちゅう挨拶の言葉を使ったり、会釈や御辞儀をしたりしていると思うか。



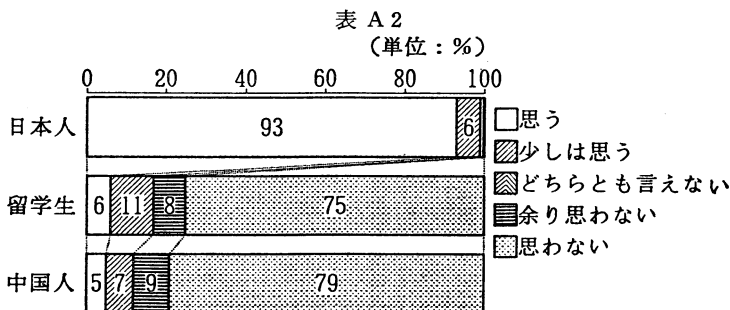
表A1を見ると、日本人の8割は、「思う」、「少しは思う」という選択肢の1と2を選び、これに対して、中国人の7割は、「どちらとも思わない

い」、「余り思わない」の3と4の選択肢に集中しているのが目立っている。なお、選択肢5「思わない」の回答率は中国人が9%, 日本人が7%であり、たいした差がない。中国人達は自分は挨拶を全然していないという感覚があるわけでもないことが窺えるであろう。中国人も、やはり何らかの形で、相手に対する自分の友好的な態度を伝えたいのであろう。

留学生の場合は「余り思わない」、「思わない」の回答が合わせて6割以上もあって、本土の中国人のそれを上回っている。これは、留学生が日本という今までの生活環境と異なる社会に入って、日本人の挨拶行動と比較した上での自己反省によるものかと思われる。我々留学生同士の間では、用件は中国語で話し、挨拶は日本語でする現象が目立っている。これに対して、本土の中国人被調査者のほとんどは、直接に日本の文化に触れたことがなく、比べようがないから、日本的挨拶行動がないことには気付きにくいであろう。

A 2

Q：自国内で買い物に行った時、店員が「いらっしゃいませ」、「お待たせしました」「有難うございました。またどうぞ」などの挨拶言葉をよく使っていると思うか。

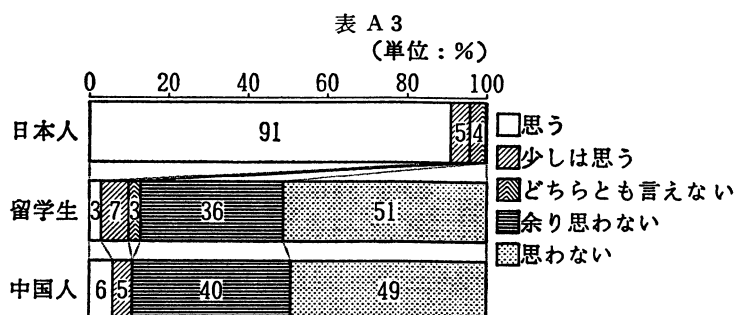


9割以上の日本人は「あると思う」の選択肢1に集中し、これに対して9割近くの中国人と8割以上の留学生は「余り思わない」、「思わない」の

選択肢4と5に偏っている。生活環境や回答者の年齢層の差を越えて、中国人の結果と留学生の結果がよく似ていることは、興味深い。表A2では、日本の店員が中国の店員より挨拶行動を多く行っていることを表している。日本では、店の売上が経営者及び店員の個人利益と直接関連があって、客に最善のサービスを提供することは店の最大の課題である。しかし、中国の経営者も店員も公務員であり、仕事上挨拶行動を日本人店員ほど多く要求されず、従って、挨拶意識も日本人店員ほど強くないと考えられる。

A 3

Q：自国の病院において、医者あるいは看護婦が「今日は」、「お大事に」などの挨拶言葉をよく使っていると思うか。



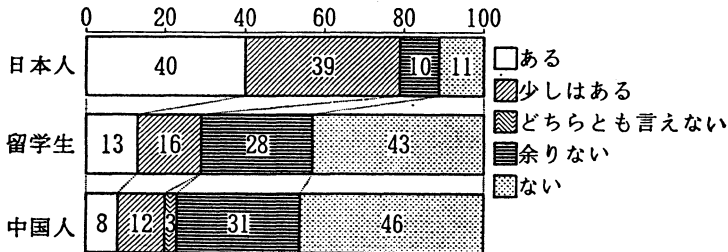
表A3では、9割の日本人は選択肢1「思う」を選び、これに対して、9割近くの中国人と留学生は選択肢4と選択肢5「余り思わない」、「思わない」に集中している。ここでも中国人と留学生の結果は、よく似ている。日本においては、患者が病院を自由に選択できるなどの理由から、病院側は、勤務者である医者や看護婦に、患者に対する挨拶行動に対して一定の要求を課す。一方、中国では、多くの患者は、政府が指定する病院にしか行けない。また、医者も看護婦も全て公務員であり、患者に対する挨拶行動は日本ほど課されていない。従って、中国の病院関係者の挨拶意識は日本病院関係者と比べて、弱いと言える。

A 4

Q：自国内で、引っ越してきた人が、隣近所へ挨拶に行くことがあるか。

表 A 4

(単位：%)



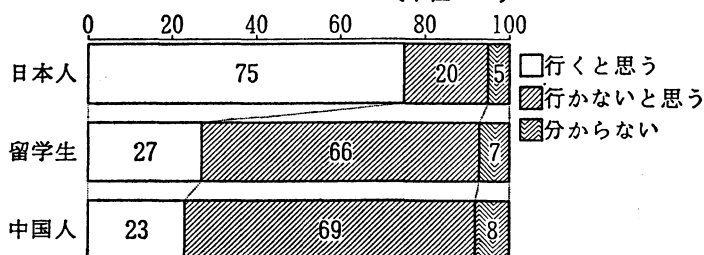
選択肢1「ある」と選択肢2「少しはある」を選んだ日本人は、8割近くおり、同じ8割近い中国人と7割の留学生は選択肢4「余りない」と選択肢5「ない」に集中している。日本では、社会生活の中で、挨拶行動を多く要求されるため、日本人の挨拶行動は、当初の社会的約束を守らざるを得ない受動的行動から、習慣的な、自発的行動に変る。また、その挨拶行動の範囲も、自分と直接利害関係のある範囲から、社会の各方面に及ぶ広範な挨拶行動へと変わっていくものと思われる。しかし、中国では、このような社会的習慣がはっきりしていないため、わざわざ挨拶に行く必要がないと考えるのが普通のように思われる。この方面でも、中国人の挨拶意識が日本人より弱いことが窺える。但し、中国人も留学生も、その2割ないし3割は、そうした習慣が「ある」ないしは「少しはある」としていることにも注意しておきたい。

A 5

Q：自国内で、周囲に影響（騒音、埃）のある工事をする時、工事主あるいは建築会社は、近所へ挨拶に行くか。

表 A 5

(単位：%)



7割以上の日本人は選択肢1「行くと思う」を選択し、これに対して、7割近くの中国人と6割以上の留学生は選択肢2「行かないと思う」に集中している。これもA4の場合と同様に、中国と日本の文化と社会の違いが裏にあって、出た結果のようである。この方面でも、日本人のほうが中国人よりよく積極的な挨拶行動を取って、挨拶意識も強いと思われる。但し、ここでも中国人や留学生の2割ないし3割は「行くと思う」と答えている。

2-2-2 使用頻度について (B項目)

日本人と中国人の挨拶行動には、使用頻度による差が認められる。

日本人の友好関係を維持するための方略としての挨拶言語行動は、多発的(同じ用語や動作を繰り返す。「どうも、どうも」と言ったり、御辞儀を何回もしたりするという現象。また、職場から離れる場合、「お疲れ様でした。先に失礼いたします。さようなら」のように多数の用語を並べるという現象)であり、連続的(すでに終わったことを再提起する。「この前、お世話になりました、本当に有難うございます」と言ったりする)であるといった傾向が見られる。

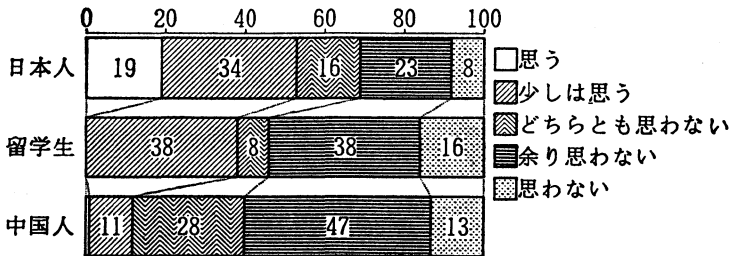
これに対して、中国人は単発的(同じ用語や動作を余り反復しない)、即席処理的(その場で終わってしまっ、再提起しない)といった傾向がある。

B 1

Q：貴方は挨拶をするとき、同じ言葉を繰り返すと思うか。

表 B 1

(単位：%)

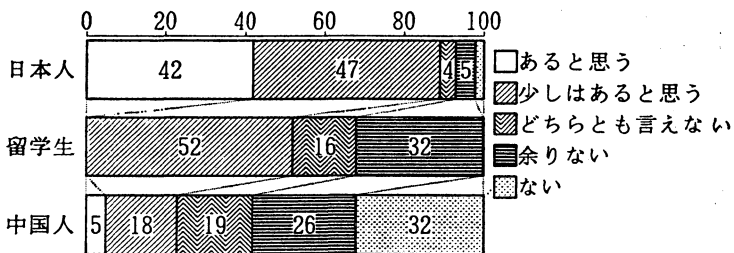


B 2

Q：貴方は挨拶をするとき、「わざわざお電話をくださいまして有難うございました。失礼いたします。どうぞ、お休みなさい」という電話を切る前のように、いくつかの表現を重ねて、使う傾向があるか。

表 B 2

(単位：%)

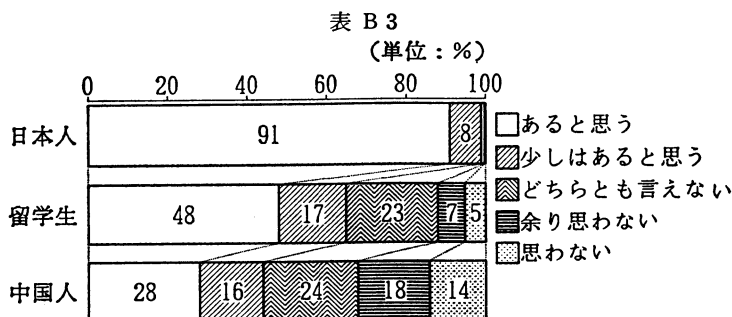


使用頻度（挨拶言語行動の多発性、連続性または単発的、即席処理的）全体から見ると、表B 1の場合、自分の挨拶言語行動には、同じ言葉を繰り返し、多数の用語を並べるという傾向が「あると思う」、「少しはあると思う」日本人が5割以上ある。また、表B 2の場合、「あると思う」、「少

しはあると思う」日本人は9割近くもあり、圧倒的に多い。これに対して、半数以上の中国人は、こういう傾向があるとは「余り思わない」または「思わない」のである。これによって、使用頻度における両国の挨拶言語行動の差が窺える。もしかすると、中国人学生にとっては、このような質問の意図が理解しにくかったのではないかとさえ思われる。留学生について、「あると思う」という選択肢1を選んだ回答者は、B1、B2を通じて、一人もいないのが注目される。これは、単発的（同じ用語を余り反復しない）、という母国語の挨拶行動が日本人の言語行動と対比されて、根強く意識されることを物語っているであろう。なお、B1、B2の回答について、中国人と留学生の回答にはかなりの差があり、興味を引かれる。

B 3

Q：お世話になった人に会った時「先日は、大変お世話になりました、有難うございました。」というように過ぎ去ったことを再提起する傾向があると思うか。



感謝の再提起についての質問に対して、9割以上の日本人は、その現象があると思っている。そして、余りない、ないと思う人は一人もいない。これに対して、あると答えた中国人は2、3割しかない。差は歴然としている。留学生の5割近くが選択肢1を選んだのは、おそらく日本人の言語習慣の影響によるものであろう。

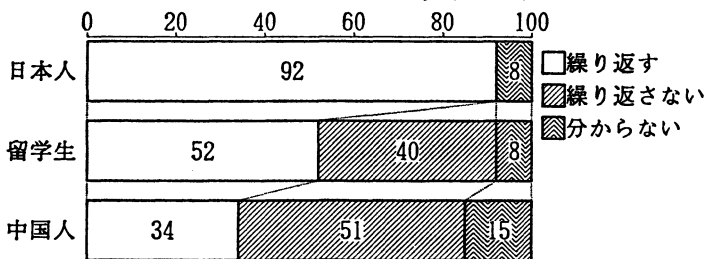
以上から分かるように、中国人は再感謝してもいいし、しなくてもいいのである。しないからと言って、それは逸脱や非礼ではなく、相手に仲間外れにされる恐れや、相手を不愉快にする心配はない。これに対して、日本では、それは社会習慣であるから、再提起してお礼を言っても、それは、特に丁寧とか誠意があるといった意味を持たず、建前の要素が含まれる可能性がある。それに比べて、中国側の再感謝は、文字通り本音の要素が多いのである。

B 4

Q：御馳走になった場合、その場でちゃんとお礼を言い、その後再び会った時、もう一度お礼を繰り返すか。

表 B 4

(単位：%)



B 4の結果は、B 3の結果とよく似ている。選択肢1「繰り返す」を選んだ日本人は9割以上であり、これに対して、3割以上の中国人と5割以上の留学生は選択肢2「繰り返さない」を選んだ。

2-2-3 形態の選択について (C項目)

日本人と中国人の挨拶言語行動には形態の選択に差があると思う。

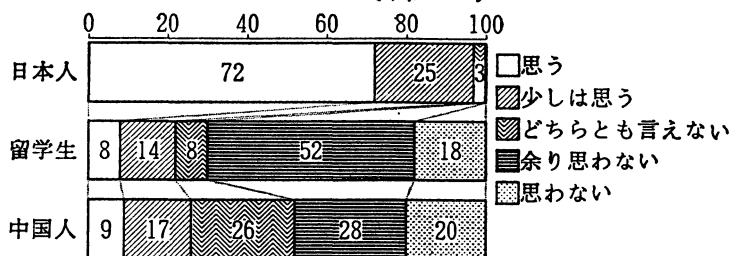
日本人の挨拶言語行動には、所定の場所にふさわしい定型化された表現を好み、しかも、非会話的であるという傾向が見られる。これに対して、中国人は、場面と関係のある、非定型的で随意的な、しかも会話的な挨拶行動を取る傾向が見られる。

C 1

Q：日本人（中国人）は所定場所に応じて、定型化された挨拶をしていると思うか。

表 C 1

(単位：%)



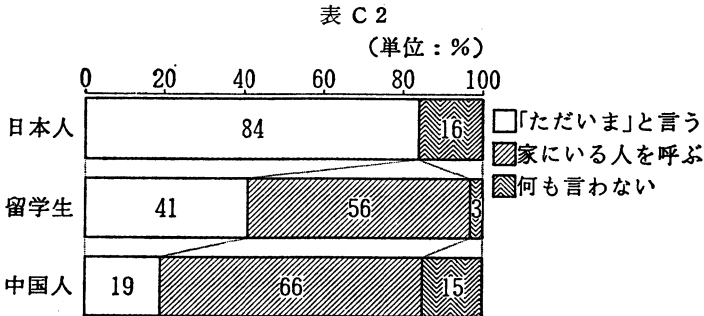
C 1の結果では、日本人回答者は、ほぼ全員、「思う」、「少しは思う」という選択肢1又は2を選んでおり、「余り思わない」、「思わない」という選択肢4と選択肢5を選んだ人は0となっている。

これに対して、1や2を選んだ中国人は3割近くしかいない。それは、中国人が、定型的な表現の代わりに、随意に多様な表現、内容的な挨拶言語行動を行う傾向があるからである。例えば、朝、人に会った時、「お早う」と挨拶したり、「ご出勤ですか」と尋ねたりする人もいるし、また、気候や、相手の身なりなどを話題にする人もいる。さらに、中国では、「食事をしましたか」という挨拶をする習慣がある。結局、中国の挨拶は、文字通りの内容で、自然会話的な特徴を持っていると言える。このために、中国では、それぞれの表現の挨拶機能がはっきりとは意識されず、挨拶研究も発達しにくい。例えば、買い物の場面を例にとると、中国では店に入ったら、店員は「何を買いたいのですか」と言って相手の答えを求める発話をする。つまり会話的である。これに対して、日本では、客は、店員の「いらっしゃいませ」、「お待ちせしました」という挨拶に、その表現が非会話的であるところから、特に返事をしなくてもいいのである。一人で食

事をしている日本人が、両手を合わせて「いただきます」と言う場面も多く見られるが、その非会話性はいうまでもなからう。

C 2

Q：普通、家に帰ったとき、何と言うか。



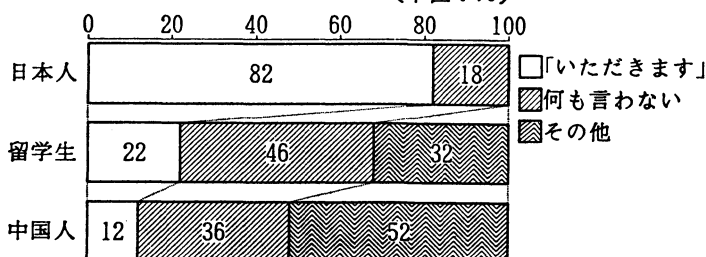
帰宅時の「ただいま」という挨拶は、日本人の言語生活にすっかり定着した表現の一つとして知られている。アンケートの結果を見ても、8割以上の日本人は選択肢1「ただいまと言う」を選んでいる。これに対して、7割近くの中国人は選択肢2を選んだのである。日本人の「ただいま」に対して、中国人は、帰宅後家にいる人を呼ぶのが習慣である（お母さんがいれば、「お母さん」と呼び、お父さんがいたら、「お父さん」と呼ぶ。それは家族に限らず、中国では、うちにいる年長者に対して、帰宅した子供に「おばさん」とか「おじさん」と言わせる躰さえある）。留学生のほうは、4割以上の人が「ただいま（我回来了）」を回答している。本土の中国人と比べれば、差が目立っており、B 3の場合と同様に日本での生活が影響していると考えられる。

C 3

Q：普通、家で食事の前に何と言うか。

表C 3

(単位：%)



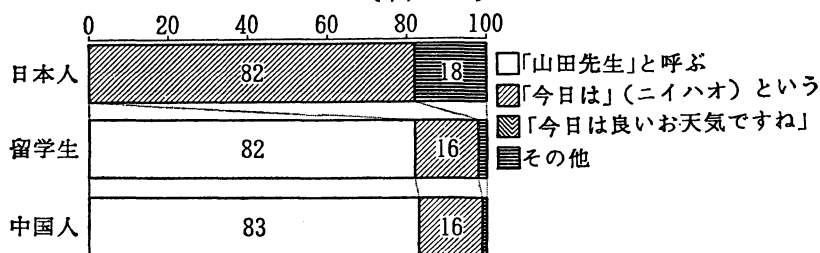
日本人は、食事の前に、必ずといっていいほど「いただきます」と言う。アンケートでも、8割以上の人を選択肢1に回答が集中している。2割近くの人は「何も言わない」を選び、「その他」を選んだ人は一人もいない。これに対して、中国人は「いただきます」（我喫了）を選んだ人は1割ぐらいいで、3割以上の人が無言で食事を始める。そして、「今天的菜不錯」（今日のおかずいいなあ）、「肚子餓壞了」（お腹がすいた）、「快來喫飯，可香了，我要好好喫一頓」（早く食べよう，おいしそう，私，思う存分に食べよう）など，銘々自分の好き勝手な言葉を言う人（選択肢3「その他」）が，5割以上を占めており，中国人の食事前における挨拶行動の随意性，非定型性を物語っている。

C 4

Q：学校の廊下で先生に会ったとき，どういう挨拶をするか。

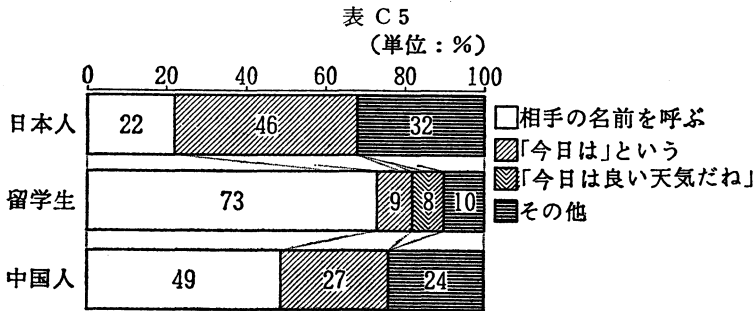
表C 4

(単位：%)



C 5

Q：アパートの廊下で同級生と会った時どういう挨拶をするか。



C 4 と C 5 は先生と同級生に出会った場合の挨拶言語行動に、定型的な傾向があるかどうかに関する調査である。

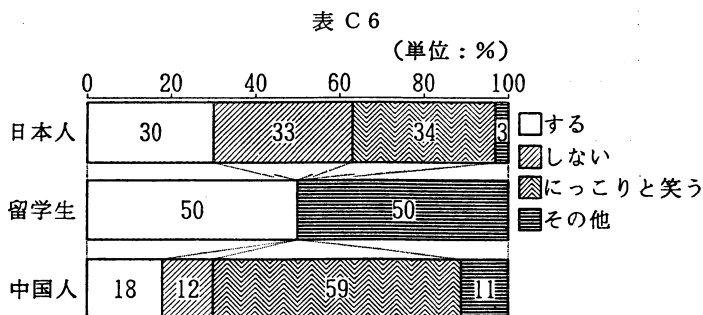
出会った人の名前や、職名などと呼ぶのは、中国で最もよく見かける典型的な儀礼表現である。すでにこのことについては C 2 のところで関連することを述べたが、相手への呼称は、気づかれにくいかもしれないが、日本人の「今日は」などに匹敵し、挨拶の役割を果たしている。これは、中国における定型的な表現の極少数の例の一つと言えるであろう。表 C 4 では、8 割以上の日本人は先生への挨拶が選択肢 2「今日は」に集中しており、選択肢 1（「山田先生」と呼ぶ）の回答者は一人もいない。これに対して、8 割以上の中国人と留学生は選択肢 1 を選んでいる。中国では「某某先生」など（もちろん先生の場合に限らない、「某某社長」でもいい）と呼ぶのは、失礼にならないばかりか、むしろ丁寧に聞こえると言ってよい。

C 5 では、同級生同士のためか、日本人に「今日は」の代わりに相手の名前を呼ぶ人が一部現れてくる。しかし、その傾向はやはり中国人に及んでいないことが分かる。一方、5 割近くの中国人と 7 割以上の留学生は選択肢 1 を選んでいるが、この場合は、C 4 のそれより少し減っており、注

目される。

C 6

Q：校外で異性のクラスメートに会ったとき、自ら挨拶をするか。

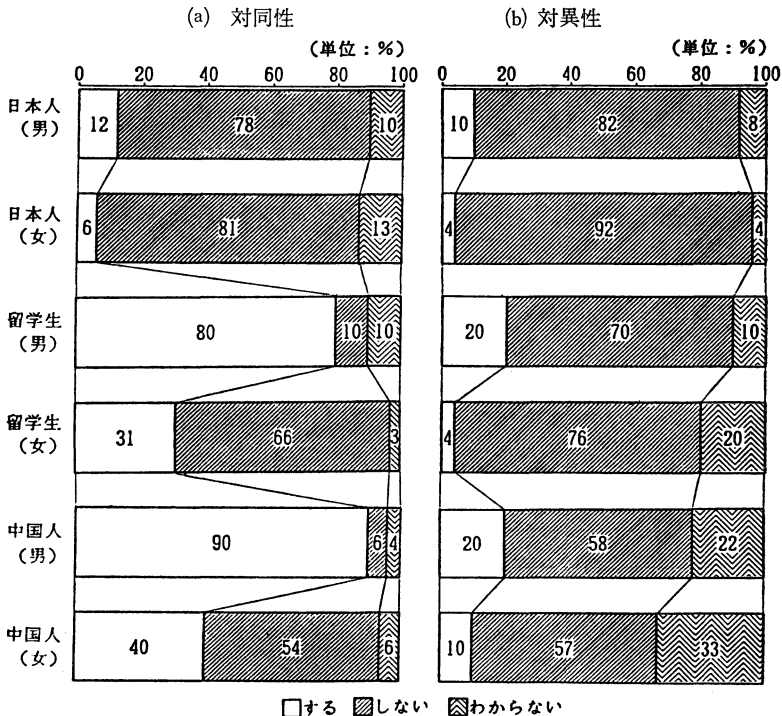


異性のクラスメートに出会った時、自ら相手に挨拶するという言語行動を取る日本人は3割で、これに対して、中国人は、1.5割ぐらいという結果が出ている。儒教の影響があって、昔は、夫婦が一緒に出かける時、中国も、日本も、二、三步離れて歩くという程、男女間の交際は控え目であったが、戦後の日本では、このような傾向が薄らいできたようである。一方、中国では、男女共学、共働きが、何十年も続いてきたけれども、なんらかの心理的ハンディキャップを乗り越えられない人が多いようである。中国人はにっこりと笑うという非言語行動を取る人が大部分である。中国人は以上の通りであるが、留学生の場合、自ら進んで、異性に挨拶をする人がむしろ日本人より多いようである。恐らく、留学生たちが、国際レベルの社交場与えられ、生活上及び就学上の必要性に迫られて、自ずと身につけた行動かと思われる。母国を離れた彼等は、仲間意識、結束力が特に強いという理由もあろう。また、留学生は既婚者も多く、異性だと言って、若者のように遠慮ばかりはしていないのであろう。

C 7

Q：例えば、夏休みに、高校時代の友達に会った場合、自ら進んで握手をするか。

表C 7



握手という親しみを表す接触行為について、男女に分けて設問をした。結果としては、日本人では、対同性と対異性の違いを越えてほとんど差がなく、選択肢1を選んだ男性はわずか1割ぐらいで、女性はほぼ0.5割ぐらいであった。これに対して、中国人は男女の差が激しく、対同性と対異性についても、差がかなり目立っている。中国人と留学生との間には大きな違いはなく、握手をする程度は、男性同士、女性同士、男性対女性、女性対男性の順に減少する。

第三部 終わりに

以上を踏まえて、中日両国挨拶言語行動の特徴をまとめてみると、次のようになろう。

中国：

挨拶意識より弱い 単発性(繰り返しが少ない)

(A1, A2, A3, A4, A5) (B1, B2)

随意的、会話性 ————— {

(状況に関係ある)

即席処理的(再提起無し)

(C1, C3)

(B3, B4)

日本：

挨拶意識より強い 多発性(繰り返し)

(A1, A2, A3, A4, A5) (B1, B2)

定型的、非会話性 ————— {

(所定の場合に定

連続性(再提起)

式的な表現)

(B3, B4)

(C1, C2, C3, C4)

調査結果を見て、日本人と中国人の挨拶言語行動の相違点がある程度明かになった。そして、留学生は、特殊な生活環境の中で、両文化の間に揺れる挨拶言語行動を取っているということも分かった。しかし、本稿は、中日両国言語行動対照研究という大きな課題に対する小さな、未熟な試みである。調査表の設問、選択肢の設定にも不適當なところ(ある調査設問は、抽象的過ぎる。留学生の調査表は、相手が日本人であるか中国人であるかを分けて、設問すべきであったなど)があり、今度の調査がどれ程事実を反映しているかには、あまり自信がない。さらに、これからもこの分野の研究を深めていきたいと思う。

本研究に対する、大阪大学の先生方のご指導に心からお礼申し上げますと共に、アンケート調査にご協力くださった各位に対し、感謝の意を表する。

参考文献

- 野元菊雄「挨拶言葉の原理」(『日本語学』8月号・1985)
 比嘉正範「挨拶と挨拶言葉」(『日本語学』8月号・1985)
 甲斐睦朗「日本語の挨拶言葉の順序性」(『日本語学』8月号・1985)
 沖 久雄「挨拶言語行動分析の観点」(『日本語学』8月号・1985)
 真田信治「挨拶言葉と方言一地域差と場面差」(『日本語学』8月号・1985)
 森山卓郎「関係修復的言語行動の原則と方略」(『談話・意味・語用論』62年度
 科研特定報告書・1988)
 南不二男「言語と行動」(『講座言語・第3巻』大修館書店・1979)
 水谷 修『話し言葉と日本人』(創拓社・1979)
 荻野綱男『日本人と中国人の敬語行動の対照言語学的研究』(1986・3)
 (大学院後期課程学生)